

全国へはばたく
19人のヤジっ子たち

【全国誌 コロンブス掲載 令和3年9月号】

「リュウキュウアユの保護活動で島の宝を学ぶ」

全校児童19人の住用小学校が リュウキュウアユの保護活動で島の宝を学ぶ



奄美市土盛海岸

今年7月に世界自然遺産登録をはたした奄美群島国立公園を流れる役勝川^{やくがわ}と住用川^{すみようがわ}に生息しているのが絶滅危惧種のリュウキュウアユだ。川沿いにある住用小学校(久永浩幸校長)ではこのアユの保護活動を2006年から継続、今年も全校児童19人が、先生、保護者、地元住民に支えられ課外活動を行っている。

授業が行われたのは7月10日(土)。1時間目には4年生から6年生までが専門家から「リュウキュウアユと奄美の川の生き物」について学んだ。その後、1年生から6年生までの19人がバスで役勝川の上流まで移動し、リュウキュウアユを観察。川辺に着いてからはアユが逃げてしまわないよう、話し声や物音を立てないようにユックリと、高学年はほふく前進しながらシュノーケルを使って水の中へ、低学年は水中メガネで川底をのぞいて観察した。

帰りのバスのなかでは、観察時とは打って変わって「川はとても水が冷たかった」「リュウ

ウキュウアユは胸からお腹までキラキラしている」「思ったよりも小さく体長は5センチくらい。胸に印がふたつあった」「群れをつくって気持ちよさそう」「まるで宝石のよう」などと口々に、うれしそうにアユと出会ったときのことを話し合っていた。また、アユが1年しか生きられないことや産卵後に命を落としてしまうことなど、授業で習ったことが頭に浮かび生命の尊さにあらためて感動したといった声も。そして、その生の営みを間近に見て「数百万年前からこの島に棲みつづけているアユの命を大切に见守りたい」「来年はこのアユの子どもたちに会いたい」と話していたという。

10月下旬の日曜日には、子どもたちと保護者らがアユの産卵地を整地する予定だ。「毎年地元の人たちが、子どもたちが川に入っていくやすいよう草をはらって道を整えてくれている。これまで活動をつないでくれた卒業生、保護者らに感謝したい」と所崎陽教頭(44

歳)は話す。この思いとつながりこそが世界自然遺産にふさわしい奄美の宝だ。



保護活動中の様子

住用小でのみなさんの取組が
しょうかいされました。

日本中が住用小に注目しています。

